

川崎ジュニア文化大賞受賞作品

サッカーボールがつないだ僕と世界と未来

東住吉小学校 6年生 林 遙馬

僕は父の仕事の都合で、幼稚園の時、川崎からシンガポールへ引っ越した。街には中国語、タミル語、マレー語が書かれた看板があり、みんな英語を使って会話する。僕ははじめ、どの言葉も分からなかったが、大好きなサッカーをシンガポールでもやりたい、とすぐに多国籍の強豪サッカークラブチームに入った。シンガポール、インド、アメリカ、ドイツ、いろいろな国の選手がいて、僕は必死に大きく体を使ってジェスチャーしたり、名前を覚えて呼んだりした。するとみんなも僕の名を覚えて、サッカーボールのパスが来るようになった。誰よりも大きな声で指示を出し、守備をした。マレーシアやタイに何度も遠征し、優勝して大きなトロフィーをみんなを持ってダンスしたり、決勝で負けて、スコール中うずくまって泣いたこともあった。

「ハルマ！ハルマ！サッカーしよう！」

大切な仲間がいる大切な場所、雨季でも乾季でも僕は一日も休まずトレーニングに行った。

そして、小学校3年の夏、スウェーデンの世界最大の少年少女サッカー大会で、80ヶ国から選手が参加するゴシアカップに出場することができた。まっ青な空に花火と風船が上がり、スタジアムは満員で、国歌が流れる中、僕はシンガポール代表として旗をふってパレードした。

「シンガポール！シンガポール！」

大きな歓声の中、みんな笑顔だった。みんな肌も髪の色も、言葉も考え方も違う。だけどサッカーを通じて心が通い、そして仲間ができる。サッカーが僕とシンガポールをつなげて、スウェーデンにも連れてきてくれた。そして、世界の国々とまたつながった。「毎年スウェーデンに行けるようにサッカーをがんばろう。」みんなでちかった。僕はずっとみんなとされると信じていた。

しかし、次の年、日本に帰国することになった。そして、日本に帰ってすぐにコロナ禍で小学校が休校になり、僕はぼつんと、どこにもいる場所がないような気持ちでいっぱいだった。だが、シンガポールのチームのオンライントレーニングに参加すると、みんなそろって、「ハルマ！元気？会いたいよ。」と言ってくれる。一人じゃない、そう思った。休校中はサッカーが上手な兄といっしょに足技を練習したり、走ったりした。

サッカーをがんばれば、きっとまたみんなに会える日が来る、と信じた。

そして5年生になり、川崎市トレセンの選手に選ばれた。選考会へ行くと、僕より上手く、足も速く、背も大きい選手もいた。でも僕は、「誰より多くの外国人と

サッカーをしてきた。自分の気持ちを伝える努力、相手の気持ちを理解する努力をしてきた。」と、いつものようにプレーをした。合格したことを聞いた時、今までがんばってきたことが、日本でも認められたようでうれしかった。川崎でも友達がたくさんできた。大切な場所がまた一つ増えた。

僕は苦しい時、いつもサッカーに助けてもらった。そしてサッカーが僕と仲間と、世界をつなげてくれた。僕は川崎市代表選手として、もっと強くなりたい。僕は小さいころから、みんな一人一人違って、それぞれの持つ良い所を出し合って、お互いを助け合えれば、大きな大きな力になることを知っている。それは、サッカーが教えてくれた。僕のプレーを見て、そのメッセージを受けとり、元気になる人がいたらいいなと思う。

「ハルマ、またいっしょにサッカーしようね。」

そうみんなに見送られてシンガポールを出発した。世界中にいるチームメイト、対戦相手。必ずまたサッカーができる日がくるよう、成長していきたい。